

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子 絵画修復家

このコラムは8月に書くべきものでしたが、私事ながら高齢のうちのおじいちゃん(私の父)が8月中の異常な暑さの中、クーラーが故障したのが原因で、2度も死にそうになったため、家族の中では一番元気で、昼間に活動できるのはどうやら私、ということ、昼も夜も病院を行ったりきたりしているうちにあつという間に秋が深まり、そしてあつという間に世界は恐慌状態に突入していました。

おかげさまで、おじいちゃんは試練をくぐり抜け、なんだかずいぶん元気になる、また私の娘とオセロに燃える日々を送れそうになって来ましたが、本日これを書いて9月30日は、1987年のブラックマンデーの再来のような、というよりそれ以上に薄気味の悪い予感の

迎えているのです。このコラムが掲載されるのは、11月号です。これから、世界はよりやばいことになっているのでしょうか……?

昔、バブルはじめだった頃、私はヨーロッパと日本を半々で過ごしている状態でした。フランスではのんびりと美術館仕事を、例えばベルサイユ宮殿の一角の、サロンの壁画をプロジェクト通り数ヶ月掛けて修復する、なんてことをやっていたのです。それが終わるとかなり暇になって、そうすると、日本の腕を買ってくださっている画廊の方から、「仕事たまってますよーそろそろ帰ってきてくださいー」というコールが入るのでした。

よくも半年も私のことを待っていて下さるものだと半ばびっくりしながら、ありがたく思っていました。だんだんバブル絶頂になってきて、会ったことも聞いたこともない画廊主(というよりにわか風呂敷画商というべき人々)がひっきりなしに私のアトリエに高額な絵画を持ち込んできた。

信じられないほど素晴らしいポナールがあり、疑わしいルノワールあり、こんなのが日本にあったのか!と驚いてしまうほどの作品を、バンバン修復お願いします。だけど保険代金を一ヶ月分でも莫大に払っているので直すのには一週間でもお願いします! 綺麗に、びかびかに直してすぐに売れるようにしてください、お客さんに逃げられちゃう!と矢継ぎ早にまくし立てて目が本当に血走ったオジサンたちにたくさん出会った。

この人達は銀行に5億を借りてこうした作品を買い、一ヶ月以内に5億5千万なんかで誰かに売る、それが成功したら一攫千金、バブルがはじけるその日まで、どきどきハラハラのばば抜きゲームをやっていた。

私は、バブル末期にアトリエに来た絵に話しかけていた。「あなたさまはババ

にされちゃってるんだねえ……。はからずも、気の毒に……。」そして次から次へと修復の仕事が急がされるのになんざいけのないのだと、知識の乏しい、というよりもとよりそんなことにはお構い無しの人達に啓蒙活動をするにも疲れ果てていた。ゆつたりとしたフランスでの仕事に戻りたくなっていた。

その当時にアトリエに押しつけてきた人たちは、夜中に私に見積もりを書けとファックスを送りつけてきたり、英文や仏文の鑑定書が読めないから読んでくれ!なんて言うもんだから、私は何度もブチッと電話線を抜いてしまったし、あまりかわらないようにしてきたので、バブルがはじけてから一体どこに消えてしまったのか今は消息は全然わからない。

しかしこういう経験があつてから、世界経済というものに私はものすごく敏感になった。反面教師というものだ。無駄な設備投資や、見栄を張って何かをする、ということは一切やらない今の私が形成されたと思う。

今回のこの状況も、すでに今年の初めからこうなる予感がしてかなり気持ち

暗かった。周りを見渡してなぜ皆平気なんだろうと不思議な気がしていた。お迎えて会う、幼稚園のお母さんたちが新しいTODSやGUCCIのバックを誇らしげに持って歩いているのを見ても、私は一人下を向いて恐慌してどんなものだろう、どうなるのだろう、と思つて考え込んでいた。本屋で見たり、ネットで調べてみたりして、あーそんなことになつたらみんなあんな高いもの買ったことなんて後悔するんじゃないか、とか、でも私みたいな何も買わないようにしてお金も貯金しても超インフレでは意味がないあと無力感を感じたりした。

とにかく、バブルが弾けた時、私のところにはきつかり2年修復の仕事は来なかつたのです。そこで食いつなげたのは、バブルの頃に右から左にやって来た作品たちの修復代金をためた貯金と、絵画教室のおかげ。裕福ではなかつたけれど、取り敢えずそれで人には頼らずに生きられた。そして、面白いことに、びつたり止まった車輪の動きがまるで逆回りするかのごとくに、きつかり2年で私の仕事はまた繁盛し始めたのです。

あの時は、まずはじめにとある税務局

から物納された美術品の調査の依頼が入り始めた。私は生まれて初めて、画廊や美術館でないと多くの名画、名品を目撃した。そしてだんだんと前は日本人が名画を買う、という状況にばかり接していたのと対照的に、今度は日本人が買った名画を外国に売る、という仕事にばかりかかわることになった。経済でのし上がっていた日本がずいぶんとしよぼくれて見える気がした時期だった……。

しかし、恐慌は、また大きく状況は違ふのだろう。アメリカがしよぼくれ、イギリスがしよぼくれ、ドイツも日本もしよぼくれる。下手をするとロシアだって元気をなくす。

私と相手は最近二人でつぶやいている。「ドバイかあ……」
今、世界の絵はきつとインドや石油産油国に集まっているに違いない。私も相手も神経質なのでインドに住むのは無理そう。でも、ドバイなら、すごい建築物がひしめき合っているらしい。「ねえねえ、ドバイはすごいらしいよ。ゴージャスなんだって。金びからしいよ。」「でも言葉どうするんすか?」「英語、無理やり。」「でも、私たちがきつと頭からシヨ

ール被んなきゃだめですよ、黒いのか。」「うーん。着る物考えなくていいから楽かもよ。」「どうする。ほんとに一緒に暮らしてみたい?」「彼女と私はもうなんか雇用関係を離れて老後を共にする連れ合い関係に至っているの、運命共同体意識は強い。」

しかしまだドバイはあまりにも未知の世界である。恐慌もまた未知の世界である。何を着ていようと、どこに住もうと、生きてさえいれば、またいつか止まった車輪は逆回転するに違いない。人間がいるところに経済があり、人間がいるところには必ず芸術はある。勇気を持って、未知の世界に行こう。(つづく)

かがゆきこ ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は講習で修復工房を主宰。